

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して(一)

木村 英明

昨年(一九九七年)九月二日から二九日にかけて、丹陽邑で開催された国際シンポジウムに出席するため初めて韓国を訪問した。主催者で、旧知の間柄にある国立忠北大学李隆助教授から招待を受けて実現したものである。李教授と筆者は、シベリア・ノヴォシビルスクで開かれた一九九〇年の国際シンポジウムではじめて顔を合わせた。そして一九九二年、ロシアや韓国、中国、米国の旧石器研究者一二名を招いて開催した札幌での国際シンポジウム「北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散」に、筆者は、韓国の旧石器研究の進展ぶりを紹介したくゲストスピーカーのひとりとして李教授(夫妻)を加えた。それが縁で、その後毎年のように韓国への招待をいただいていたが、どうしても応ずる状況になくこれまで不義理を重ねてきた。しかし今回ばかりは、頻繁に届く誘いのファックスや電話、しかも知人を介しての懇請などがあって、参加を決意した次第である。発掘調査(網走管内

小清水町アオシマナイ遺跡)の合間を縫っての慌ただしい旅立ちは、正直気が重く、ようやく実現した韓国訪問を喜ぶ気分でもなかった。しかし、丹陽および忠北大学でのシンポジウム、そしてその後実施された丹陽・忠州・清州・公州・扶餘・ソウルと巡るエクスカーションなど貴重な体験は、予想以上に大きな収穫をもたらした。日本では失われつつあるエキサイティングな議論に触れながら韓国はもちろん、中国やロシアの研究の現状を理解する機会となったし、遺跡や遺物を直接見学・観察できる幸運によって、シベリアや日本の旧石器に関する自身の研究と比較しうるまたとない好機となった。何よりも、韓国の旧石器研究を支える多くの研究者たちとの新たな出会いがあった。シンポジウムを通して印象的であったのは、アメリカやフランス、そしてロシアで学び、しかも彼の地で博士号などを取得したという若い研究者たちの活躍が目立ったことである。国際化の波の中で韓国旧石器研究の新時代が築かれつつあることを実感できたし、その先導的な役割を担う李教授の評価が再認識されつつあることを知った。

ここでは、シンポジウムでの研究発表・討議と、エクスカーションで訪ねたいいくつかの遺跡の概要を紹介し、東北アジアにおける研究の現状と課題の一端を明らかにしたい。

シンポジウムが開かれた丹陽邑は、ソウルの東南方およそ一四〇^キ、忠清北道東南部、南漢江(ナンハンガン)上流に位置する。旧邑の大部分は、一九八五年忠州ダムの建設のために水没し、新たにできた巨大な人造湖のほとりに現在の丹陽邑が開かれている。町並みは近代的に整備され、往時の面影は野外博物館の清風文化財団地に残るだけとなっている。また丹陽郡は、土地の二八%が国立公園によって占められるほどに、韓国有数の景勝地として知られており、石灰岩地帯に刻まれた溪谷や奇岩、鍾乳洞などが訪れる人々を魅了して止まない。シンポジウムの後、

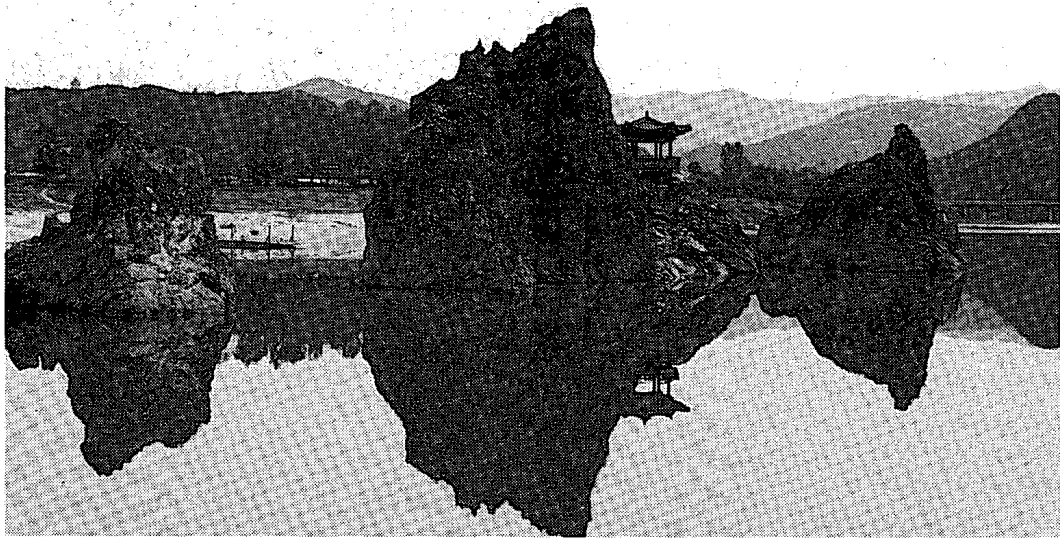


漢江流域にひろがるソウル市(上空より)

筆者らも、丹陽八景のひとつ、南漢江のエメラルドグリーン
の水面に男峰・妻峰・妾峰の三岩が並ぶ嶋潭三峰、石門、そ
して一七〇〇坪にわたって続く古薮鍾乳洞などに案内され
た。

さて、今回の垂楊介 Suyangge 遺跡 『史蹟』 指定記念第二
回国際シンポジウム 「垂楊介遺跡と周辺地域」 は、二二日と
二三日の両日にわたって、湖畔の丹陽観光ホテルで行われた。

第一日目の午前中は、漢陽大学人類学部の裴基同 Bae, Kidong
教授が 「韓国中央部パジュ、クムパリ旧石器遺跡の石器群と
形成過程について」、中国科学院古脊椎動物与古人類研究所
の黄慰文 Huang, Weiwenn 博士と Hou Yamei が 「中国南部の洞
穴遺跡、盤県大洞 Paxian Dadong での発掘」、筆者が 「黒
曜石・ヒト・技術」と題して基調報告を行った。午後からは、
ロシア・ウラジオストク歴史学・考古学・民族学研究所の
Nina A. Kononenko 上級研究員が 「東アジアにおける更新世
後期～完新世前期の文化交流について」、忠北大学の李隆助
Lee, Yung-jo 教授・禹鐘允 Woo, Jong-yeon 学芸研究士が 「垂



丹陽八景のひとつ、嶋潭三峰



古薮鍾乳洞(左右とも)

楊介Suyangge「文化複合と展望」、ノヴォシビルスク考古学・民族学研究所のAnatoly P. Derevianko所長・P.V. Volkov上級研究員が「アムール地域の先史居住民による古経済の進展(旧石器時代から新石器時代にかけて)」、檀國大学の韓昌均Han, Chang-Gyunが「ピョンサンーリ旧石器時代の第二段丘堆積物の年代について」と題して研究発表を行った。第二日目は、忠北大学の洪美英Hong, M.Y.講師が「ボウム・ボン洞穴の旧石器文化(フランス、アルプスドヒュウ州クイソ)」、古脊椎動物与古人類化石研究所の金昌柱Jin, Changzhu博士・忠北大学の李隆助Lee, Yung-joが「韓国チョンウオン、トゥルボン洞穴のコウモリ



裴 基同 教授

化石について―その分類と環境」、遼寧省文物考古学研究所の顧玉才Gu, Yucan副所長が「金牛山人研究の新たな課題」、木浦大学の李憲宗Lee, Heon-jong教授が「韓国後期旧石器時代石器製作伝統の多様性」、ノヴォシビルスク考古学・民族学研究所のAnatoly P. Derevianko所長・Anatoly N. Zenin上級研究員が「アルタイ地域の洞穴と開地遺跡例からみたムステリアン―後期旧石器時代への移行」と題して研究発表を行い、最後に総合討論が行われた。

この他、日本から同志社大学の松藤和人教授（「後期旧石器時代における九州と韓半島の文化交流」）と東海大学の織笠昭教授（「垂楊介遺跡と日本列島の親縁関係についての研究―ナイフ形

石器文化から後期細石器文化へ」の参加が予定されていたが、欠席された。

斐基同の報告「韓国中央部パジュ、クムパリ旧石器遺跡の石器群と形成過程について」は、前期旧石器とみなされるクムパリ遺跡の発掘調査と、遺物が集中して発見された特殊な「落ち込み」についての概要報告である。

遺跡は、ソウルの北五〇^キのクムパリ村にある。玄武岩台地が河川の侵食を受けてできた丘陵の頂部に立地し、北二〇〇^キをイムジン川が西流する。

一九八九年に、国立文化財研究所考古学部門によるハンタン―イムジン流域調査が実施された折に、クムパリ村近郊の丘で両面石器と石片が採集され、調査の端緒となった。このクムパリおよび隣接するチャングパリ地域には基盤である玄武岩の上に良好な第四紀層が堆積していることから、かねてから石器の発見が期待されていた。そして、一九八九年から一九九二年にかけて四回の調査が行われた。最終的な報告はこれまでになされていないが、一九九〇年に漢陽大学で開催された歴史学年次集会で、また一九九七年にシムによって大量の石器に関する分析結果が報告されている。

発掘は、丘陵のもっとも高い位置に二つの地点が選ばれ実施された。南に第一地点、北に第二地点で、両者の距離は二〇〇^キである。遺跡の層序は、耕作土層、褐色粘土層、赤色粘土層、褐色砂層、そして基盤の玄武岩へと続く。玄武岩上の層厚は五―六^キを数え、遺物は、主として上部の粘土層から出土し、特にその集中は褐色粘土層の最上部に見られたという。なお、地表下一・五^キの赤色粘土層からもわずかに出土し、将来下層の発掘が必要であろうと指摘する。

両地点で、内部に石器の集中が見られる楕円形のへこみが掘り出された。いずれも赤色粘土層上にあり、覆土は

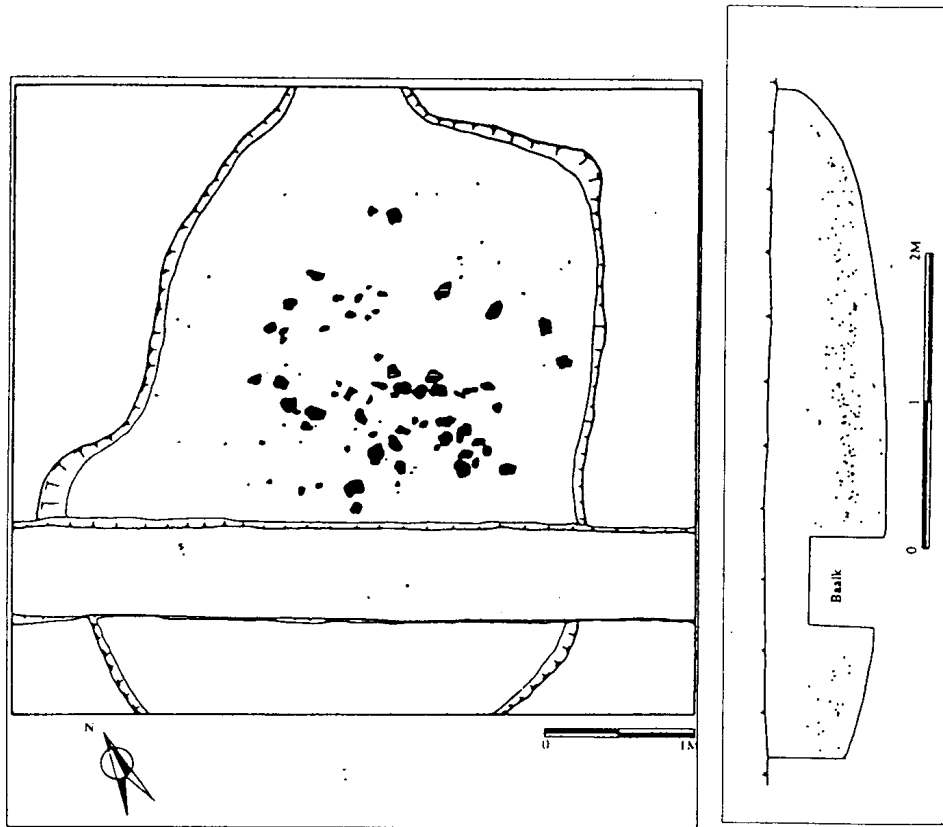


図1 クムバリ遺跡発見の「落ち込み」と遺物出土状況(平面図・断面図)

褐色粘土である。第一地点の「落ち込み一」は、長さおよそ五層、幅三・五層の楕円形を呈する。覆土は、層界不明瞭であるが、明褐色粘土層、灰色粘土層、明褐色粘土層の三層の分層が容易であるという。中央には直径三〇〜四〇センチの構造土パターンがみられるが、壁へ向かうにつれて不明瞭になる。覆土下層部には垂直の楔が入る。「落ち込み一」の西壁は急角度でしかも高い。遺物は、表土下四〇〜六〇センチの上部二層に集中するが、特に灰色粘土層に著しい。

一方、「落ち込み二」は、遺跡の西側を走るバス道路のために完掘されていないが、浅い。遺物の構成も、大形の石器類の多い「落ち込み一」とは異なり、小形のものが大部分を占め、その大きさも多種多様である。

「落ち込み一」と「落ち込み二」の遺物は、技術的にも形態的にも全谷里石器群に類似するとみなされている。両面加工石器、ピック、クリーヴァー、チョッパー、削器、加工のある礫、多面体石器、石核などが出土したが、「落ち込み一」の大形の石器と剥片類、「落ち込み二」の小形

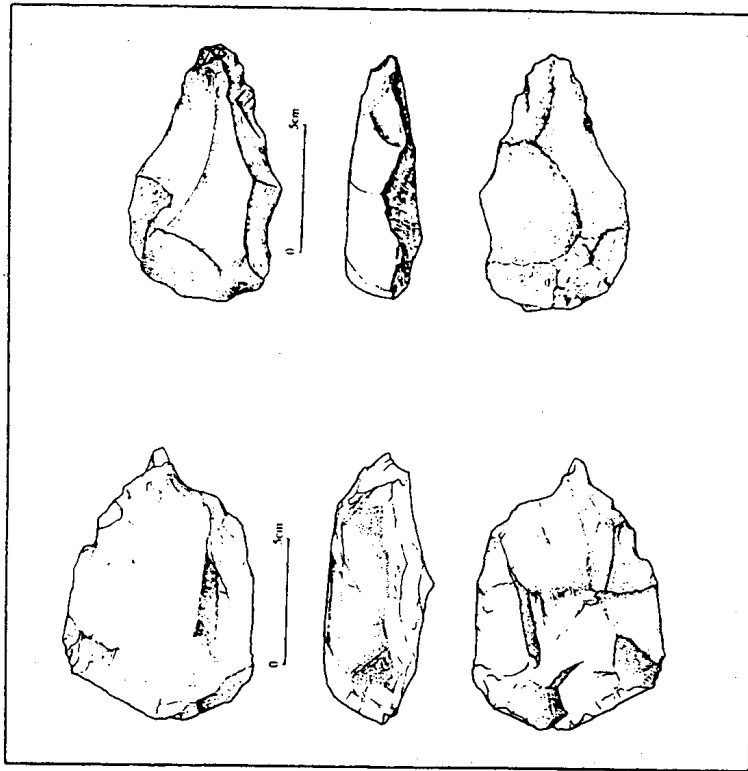


図2 クムパリ遺跡のハンドアックス

の剥片類という遺物構成差は、異なる遺跡形成の結果と考察する。なお、落ち込みの形成について、洪水、あるいは風倒木など自然の営力による可能性を検討しながら、例え何らかの自然の営力が加わったとしても、人為的な働きかけ、あるいはくぼみの整形、そして利用の可能性が除外できないとし、寒冷シーズンにおける一時的な避難小屋として使われたかもしれないと考察する。後代の堅穴住居址に類似する形態、急な壁、遺物の集中、しかもそれが水平な層をなすことなどを、人為的な所作の結果とみなすが、根拠はなお薄弱で、将来の地質学的調査をはじめとした検討が必要であるとする。

さて、絶対年代はこれまでのところ測定されてはいないが、クムパリ遺跡の年代は全谷里遺跡に近いもので、韓国の前期旧石器時代の石器群であることは間違いないとみる。クムパリ遺跡の玄武岩の年代が、全谷里遺跡の頂部流出の年代と同じ二二〇〇、〇〇〇YBPであること、またクムパリ遺跡の玄武岩上の堆積物の埋積作用が終了するの

は全谷里遺跡よりもやや後の時代であるが、その堆積層の形成は、最終氷期に先立つ七五、〇〇〇YBPの年代、中期更新世後期あるいはリス／ヴェルム間氷期の新しい時期とみなされることなどが、主な理由である。なお、クムパリ遺跡では、河食を示す下層上部にある層中にヴェルム氷期相当の風成起源堆積物が指摘されている。そして、クムパリ遺跡の西一〇^キにあるジュラルニ遺跡の最上層では、始良火山灰が発見されている。従って、直接にクムパリ遺跡石器群の年代を示すものではないが、その上限が二三、〇〇〇YBPにあることを示唆するのかもしれないという。



黄 慰文教授

ともあれ、今回報告されたクムパリ遺跡の石器群は、ハンドアックスなど両面加工石器によって特徴づけられる全谷里石器群の内容をさらに補強する効果をもたらしたが、落ち込みの存在など独自の様相もみられており、落ち込み内遺物の詳細な分析が期待される。また、一九九二年の発掘で、より下層の赤色粘土層中にも遺物の集中が見られたということから、石器群の層位的・編年的研究の進展が期待される。

黄慰文Huang WeiwenとHou Yameiによる報告「中国南部の洞穴遺跡、盤県大洞 Paxian Dadong での発掘」は、一九九一年以来の発掘調査が続けられている中国南部グイジョウ Guijiaohou 高原に位置する盤県大洞 Paxian Dadong 洞穴の最近の成果報告で

ある。

洞穴は、Shiliping川流域に位置する小高い山（比高二三〇呎）の山腹に立地している。洞穴の床面は、標高一六三〇呎、川との比高三二・四呎を数える。堆積層は、およそ五層に区分されているが、一〇〇年ほどの採掘活動によって一〜四層が攪乱を受け、わずかに五層がプライマリーな層とみなされている。包含層中に、動物化石、人類化石、石器、火使用の痕跡（木炭、焼けた骨、灰）などがみられたという。

一九九二年と一九九三年の発掘で、動物骨四三種が確認されているが、それらは、更新世中期から後期にかけて中国南西部高地と南部山岳地域との中間地域に棲息していたものとみなされている。すなわち、ステゴドン・ジャイアントパンダ動物群の主要構成種からなり、寒冷乾燥気候下に棲息する動物を含む亜熱帯気候種で構成されている。

ここでは、二つの人類の歯が発見されている。形態学的な観察によれば、北京原人に似ているという。

そして石器は、一九九三年までの発掘調査で二〇〇〇点ほどが発見されている。石材は、チャート、玄武岩、石灰岩、砂岩、トラバーチンなどで、山の斜面の露頭や、河床、洞穴でも入手できるものである。

石核は、総じて小型であるが、大きく2群に分けられる。単打面、両極打面、多打面を有する剥片石核（I群）と、「ルヴァロワ尖頭器」様剥片を剥ぐための石核、あるいはルヴァロワ剥片を剥ぐための円盤状石核などを含む調整石核（II群）である。剥片も小形で、非調整打面の不定形剥片、調整打面を持つ剥片、打面再生剥片、ルヴァロワ剥片、ルヴァロワ尖頭器様剥片などを含む。剥片や石核の他に、礫を素材とした礫器、スクレーパー、錐、抉入石器、鋸歯縁石器、搔器、ハンドアックス、ピック、チョップパーなどがみられる。

盤県大洞石器群を理解するうえで極めて重要と思われる石器は、ルヴァアロワ技法の存在を推測させる剥片・石核である。もちろんそれらの剥片剥離技法が主体的に存在するという状況にはないようであるが、仮にそうした理解が正しいとすれば、ルヴァアロワ石器群が中国南部にまで及んでいたことを示す資料ということになる。これまで、北部の周口店一五地点、水洞溝 Shuidonggou、丁村 Dingcun などの一部資料に、ルヴァアロワ技法の存在が予測されていたが、今後の比較研究が極めて注目される。

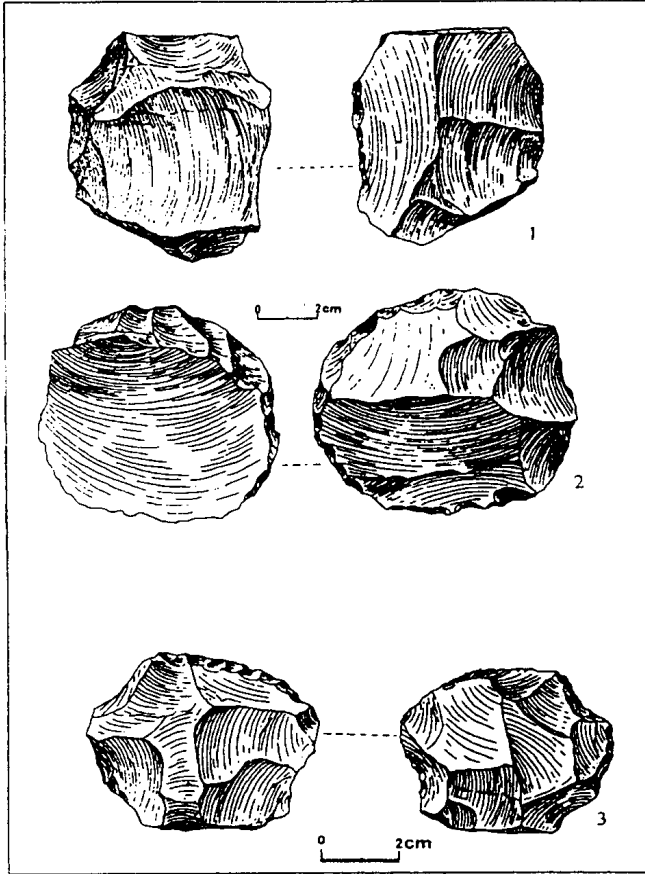


図3 パンシーアン・ダドン洞穴出土の遺物
 1・2.ルヴァアロワ様石核
 3.円盤状石核

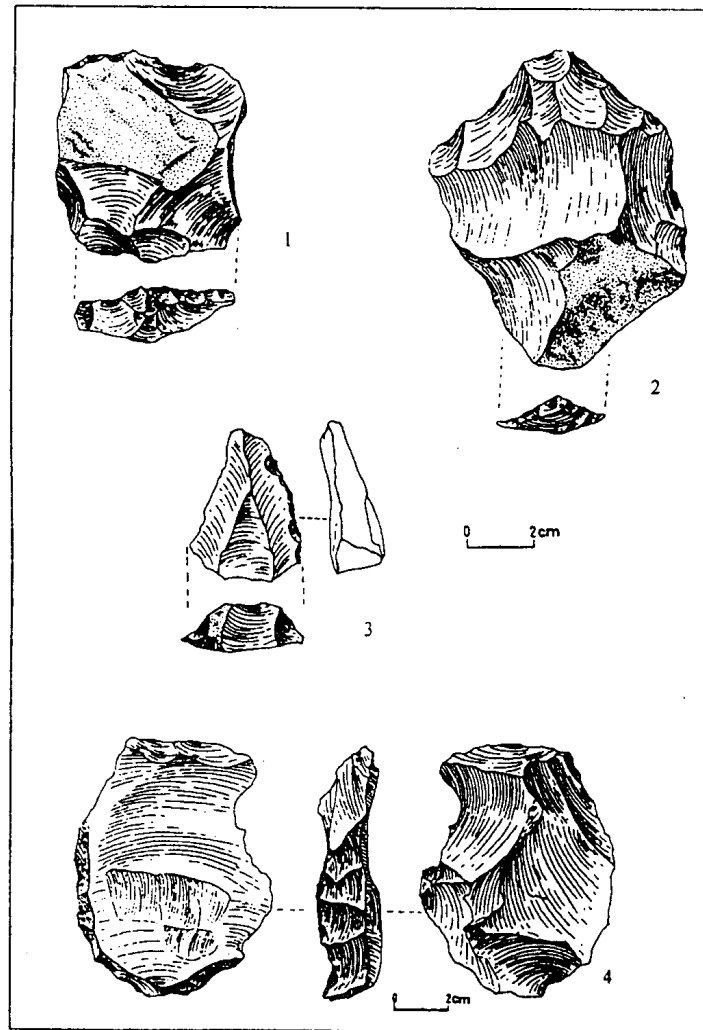


図4 盤県大洞出土の遺物
 1・2.ルヴァロウ様剥片
 3.ルヴァロウ様尖頭器
 4.打面再生剥片

なお、石材のひとつトラバーチンによるウラニウム年代の測定結果は、次のとおりである。試料一が二三万年前、試料二が二〇万年前、試料三が二六万年前であり、哺乳類化石や人類化石、石器群のデータともよく一致しているとみられている。しかし、B区出土の歯からは、六万二千十六千年前、四万二千十三千年前、一万九千十一千年前、一万七千十一千年前の年代がでており、これまでのところ、両者の年代の開きは説明できないでいる。

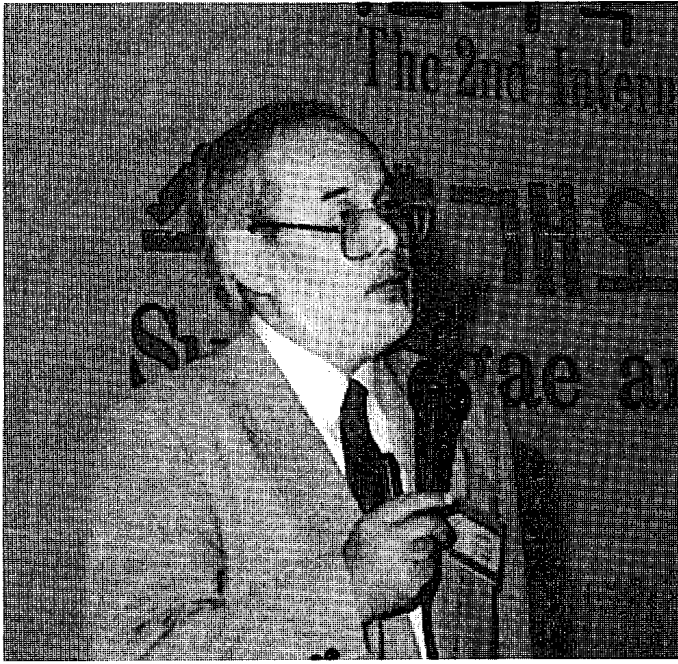
この後に、筆者が「黒曜石・ヒト・技術」を報告した。詳しくは省略するが、後期旧石器時代における有数な黒

曜石原産地である北海道・白滝から黒曜石がどのような社会組織のもとにどのようなにして北海道東部・南部の他地域、あるいはサハリン・大陸の遺跡にまで運ばれたかを考察し、これまでに示してきた「分業」仮説、「ネットワーク」仮説、「テクノ・コンプレックス」仮説を紹介した。

Nina A. Kononenkoの報告「東アジアにおける更新世後期～完新世前期の文化交流問題」は、沿海州、特に南部での主に土器と伴う旧石器時代の石器群を示し、更新世後期の後半から完新世前半の文化拡散や移動を考察したものである。なお、報告中には、東北福祉大学梶原洋助教授らとの

共同調査による資料が一部含まれており、すでに日本で紹介されたものもある。

ウスチノフカ七遺跡 ゼルカリナヤ川の第四段丘に位置し、川との比高は四〇メートルをはかる。サルタン氷期前期の寒冷乾燥気候を示す氷楔で部分的に破壊されたシルト質の赤褐色土層中に、石刃石器群が含まれる。石刃石器群は、発達した技術を示している一方、打面には細かい剝離痕が見られ、断面は突出したシャポー・ド・ジャンダルの特徴が窺えるという。遺跡からは未だ石核が発見されていないが、石刃剝離前に行く細かな打面調整、あるいは両設打面などにみられる石刃技法の特徴は、カラ・ボム遺跡のものに類似し、ムステイエ文化の石刃技法、中期旧石器時代の石



筆者



カノネンコ上級研究員

器群に関連があるという。従って、ウスチノフカ七遺跡の石器群は、カラ・ボム遺跡のような中期旧石器時代の伝統を含むと同時に、次のウスチノフカ一遺跡に共通する石刃伝統を兼ね備えた石器群と理解されている。

ウスチノフカ一遺跡 亜プリズム形／エピルヴァロワ形石核に加えて、日本の二三、〇〇〇一四、〇〇〇YBP相当のナイフ形石器に類似する縦長剥片製ナイフ形石器、石刃製の大形搔器、それに垂楊介 *Suyangge* 遺跡IV層出土の有茎尖頭器などが出土する下層、細石刃石器群を特徴とする上層とに分層できるといふ。

従来から二つの文化層に分けられることは指摘されており、筆者もそのことを紹介してきたが、ウスチノフカ六遺跡と同三遺跡の資料が新たに加わる中で、これまでになく石器群の内容が整理されている。特に上層の石器群に、セレムジャ石器群やオシポフカ石器群がかかわることを明らかにしている。

ウスチノフカ六遺跡 一九六〇年代初めから知られていた遺跡で、典型的な細石刃石器群の遺跡である。放射性炭素年代が一、五五〇±二四〇(GEO一四一二)、一一七五〇±六二〇(SOAN一三五三八)。日本で言うところのホロカ型や湧別型・峠下型に類似した楔形・舟形細石刃核、木葉形両面加工石器、トランスバース型の彫器などとともに、特異な小形の石鏃、黒曜石製の舟形細石器が加わる。報告者によると、小形の石鏃は、沿海州の

旧石器時代石器群には従来みられなかったものであるが、日本や韓半島では「新石器時代」早期に伴うものと同じであるという。特に日本では、韓半島かサハリン経由で伝わった細石刃石器群が、一三、〇〇〇〜一二、〇〇〇 YBPの頃に両面加工石器伝統に変わったが、沿海州南部でも、ウスチノフカ六遺跡と同三遺跡が同じような変化を示している。要するに、これらの変化は完新世前期に起きたことであるが、小形の有茎尖頭器と局部磨製石斧が、更新世後期から完新世前期の時期にかけての東アジア南部との継続的、あるいは断続的な交流の結果を示すとして注目する。

なお沿海州では、例えば石材が、東部では珪質凝灰岩、南西部では黒曜石を利用するように、細石刃石器群の発展が内陸部と沿海部とで異なるとみられている。

ウスチノフカ三遺跡 木葉形・月桂樹葉形などの両面加工石器を特徴とする石器群である。この他、小型の三角形鏃や搔器などがみられるが、何よりの特徴は、アムール河流域、中国、韓国、日本に共通する土器を伴うことであるという。

チエルニゴフカ一遺跡 沿海州における初期の土器は、細石刃石器群に伴うらしく、ここで新しい資料が得られている。沿海州西部に位置する遺跡で、一九八七年に、アーラ・V・ガルコーヴィクが土器片を採集した。沿海州南西部に典型的な石材から作られた細石器を伴うことが判明している。多くは黒曜石の小礫を利用し、整形に際しては多様な調整法が施されているという。なお、大型の石器は他の石材が利用されている。石器群の内容から、ゴルバトカ三遺跡、イリスタヤ一遺跡、チモエーフカ一遺跡の年代に近いものと考えられている。

マロジェージュナヤ一遺跡 ウスリースク市から三二^キのゴルバトカ村近くに位置している。ホロカ型、湧別型、

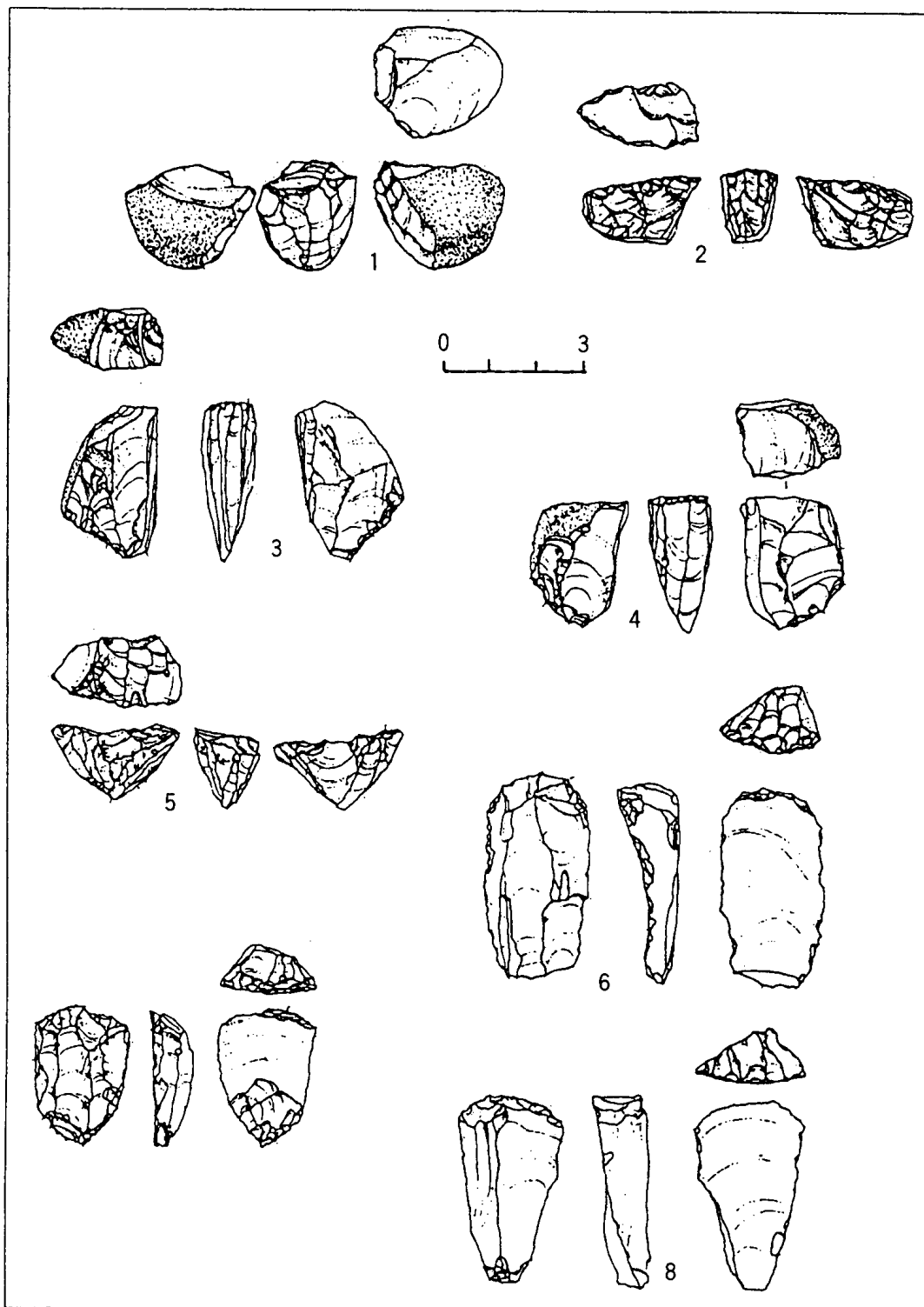


図7 ・マロージェジュナヤ遺跡出土の遺物
1～5.細石刃核、6～8.搔器

峠下型に類似した細石刃核、荒屋型彫器、搔器、両面加工石器、大量の黒曜石製の細石刃が出土する。その遺物群は、ゴルバトカ三に類似しており、土器片が発見されるとみられている。

以上を踏まえて、更新世後期から完新世早期の文化の拡散・移動が、大陸の沿海州から沿岸北部、そしてサハリンへ及ぶコースのみならず、沿海州と東アジア南部との間でも行なわれていたこと示すであろうと結論した。

さて今回の国際シンポジウムは、人造湖を挟んでおよそ会場（丹陽観光ホテル）の対岸にある垂楊介Suyangge

遺跡の『史蹟』指定を記念して開催されたのであるが、李隆助

Lee, Yung-jo・禹鐘允Woo, Jong-yeonによる「垂楊介Suyangge—文化複合と展望」は、その垂楊介Suyangge遺跡に関する研究発表である。札幌国際シンポジウムでの報告を基礎に、極東・中国・日本の旧石器石器群との関係など新たな研究を加えた内容になっているが、概略は次のとおりである。

垂楊介Suyangge遺跡は、韓国忠清北道丹陽郡Aegong-niに位置し（東経一二〇度二〇分、北緯三六度五七分一五秒）、南漢江上流、激しく屈曲する河がほぼ真つ直ぐに流れを変える辺りの左岸に立地する。開地遺跡で、標高一三三二mを数える。巨大な忠州ダムの建設によって旧邑ともども遺跡の大部分が水没することとなり、一九八三年から一九八五年にかけて発掘調査が行われた。これま



李 隆助教授

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して

でに、一二五〇平方メートルが発掘された

韓国・北朝鮮両地域において発掘・報告された旧石器時代遺跡はあわせて三四にのぼるが、垂楊介遺跡はその広がりや遺物出土量においてもっとも大きな遺跡のひとつとみられている。なお、水没地域、および周辺地域では、片麻岩・堆積岩の上に石灰岩層が発達し、大小様々な洞穴が口を開け、そのいくつかで人類による居住が確かめられている。垂楊介遺跡以外の、忠州ダム建設関連で発掘調査された堤川 Chech'on と丹陽 Tanyang 地域の重要な遺跡としては、Chommal 洞穴、Sangshih 岩陰、Todam Kum 洞穴、Kungliga 遺跡、Ch'angnae 遺跡などが知られている。

旧石器時代の文化層（Ⅳ層とⅤ層）から、ゴヨウ、スギ、イネ科の草本などの花粉や胞子の出現が認められており、寒冷湿潤の気候が想定されている。またツバキ、ゴヨウ、カラマツ、その他の樹木の年輪によれば、当時樹木の成長はゆっくりしたものであったという。

垂楊介 Suyangge 遺跡は、五枚の文化層からなり、細石刃核のほとんどはⅣ層から出土し、「中期旧石器時代」とみられる石器はⅤ層で発見される。そのⅣ層の放射性炭素年代は、一八、六三〇YBP と一六、四〇〇YBP と提出されている。

遺跡において四九ヶ所の石器製作址が確認されており、その付近からは台石、ハンマーストーン、大量の剥片類が出土した。なかには、頁岩の一種、黒い斑点を特徴とする石材で作られた剥片・石器類があわせて一四二点出土し、うち一八点が接合したという。頁岩が豊富に利用されているにもかかわらず、遺跡内では産出せず、垂楊介遺跡の南一・五キロの産地で獲得されたものとみられている。この他、「ハンドアックス」、チョッパー・チョッピングツール、搔器、削器、ハンドナイフ（筆者註・石斧、あるいはその未完製品）、「有茎尖頭器」と細石刃核などが出土

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して

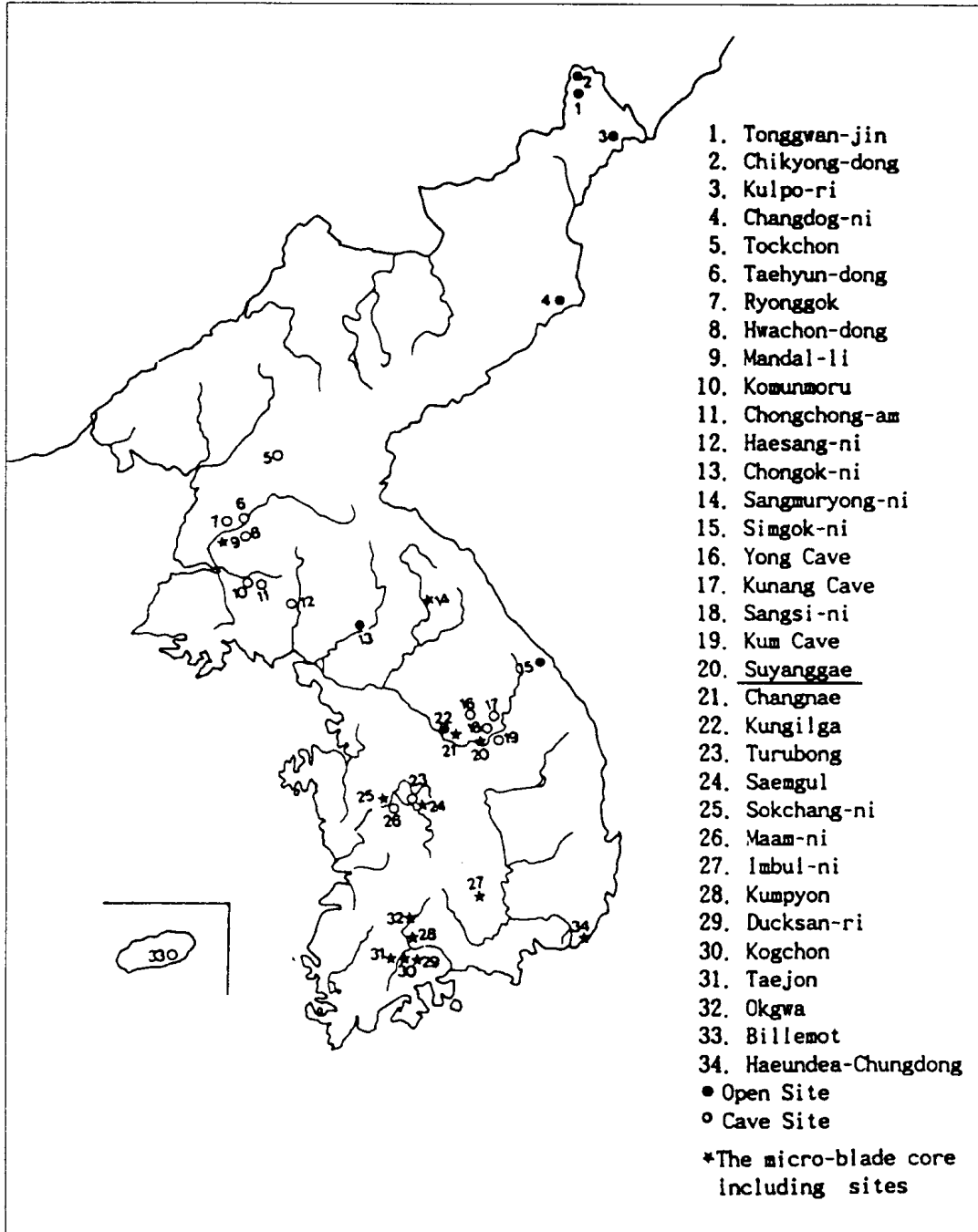


図5 朝鮮半島の旧石器時代遺跡

している。

垂楊介遺跡の「ハンドアックス」は、F・ボルドのハンドアックスの分類によれば、IVタイプに該当するもので、主に楕円形を呈し、旧石器時代のアシュール伝統を引くムステイエ文化の交互剝離技法の影響がみられるという。報告者が、垂楊介遺跡の始まりを中期旧石器時代とみなす理由のひとつで、これまで異論が多かったところである。

垂楊介Suyangee遺跡の調査が、とりわけ日本人研究者に注目されることになったのは、大量の「有茎尖頭器」の出土があったからである。

あわせて四八点の有茎尖頭器は、およそ1ヶ所に集中して発見されている。主に珪質頁岩を素材としているが、石英製四点など、他の石材も利用されている。その平均的大きさは、長さが六・二センチ、重さ一〇・八グラムであるという。茎の形態から、大きく打面の一部が遺存しているもの（タイプI）と打面を残していないもの（タイプII）に分類し、タイプIは断面形状からさらに茎状（a類）と四角形あるいは亜台形（b類）とに、タイプIIは三角形（a類）と円形（b類）、不定形（c類）とに細分される。また製作技法から、茎を、四方向から加工するもの、三方向から加工するもの、二方向からしかも主要剝離面から加工するもの、二方向から、しかも稜ある反対面から加工するもの、二方向から交互に加工するものなどがあるという。

垂楊介遺跡の有茎尖頭器を特徴づけるのは、二方向から、しかも稜ある反対面から加工された、四角形ないしは亜台形を呈するものであり、ヨーロッパのアテール文化のものに比較ができるという。垂楊介の有茎尖頭器は、日本で剝片尖頭器と分類され、韓国に近い九州地域で発掘されている。それ故、両者の関係が議論されているが、むしろアテール文化の移動と領域の拡大に関する新たな理解を可能にさせており、日本やシベリアの旧石器時代遺跡

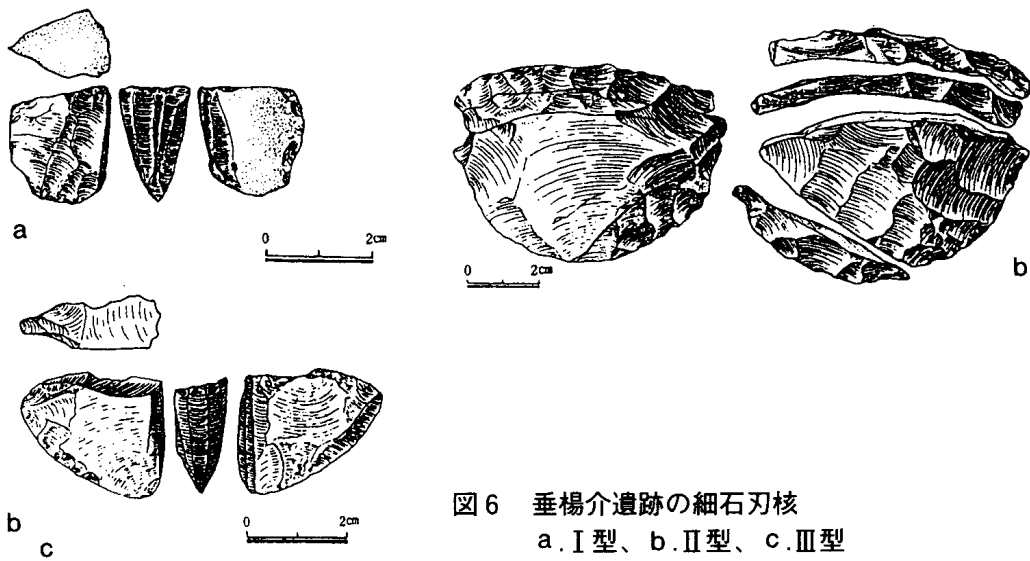


図6 垂楊介遺跡の細石刃核
a. I型、b. II型、c. III型

との関連についてはなお科学的に究明されるべきであろうとする。

「ルヴァロワ剥片」が尖頭器の素材に用いられ、押圧剥離で茎の作出が行われているが、特別な鋸歯縁技法、あるいはノッチ技法が施されており、ここでもルヴァロワ技法との関連が考慮されるという。

垂楊介Suyange遺跡の出土品の中で、有茎尖頭器と並んで注目されるのが、細石刃核である。

後期旧石器時代の文化層とされるIV層を中心に、あわせて一九五点の細石刃核が発見されている。そのうちの八六％が、珪質頁岩を素材としており、その他、斑岩やチャートなどもみられる。わずかながらではあるが、他から持ち込まれたであろう黒曜石(七・二％)が含まれている。

細石刃核の平均的大きさは、五^ミリ(重量は三二・五^{グラム})である。

打面形成など石器製作技法の特徴から、垂楊介遺跡の細石刃核は大きく三類に分類される。ひとつは、平らな礫表を未調整のまま打面としたものである。剥片の片面ないし両面からの粗い成形剥離で、半月形あるいは舟形に仕上げられている。I型細石刃核、あるいはI技法とされる。次に、縦長の剥離加撃で準備された打面をもち、表裏とも入念な成形剥離が施されたII型細石刃核、そしてそれを作り出すII技法が区別される。

表 1

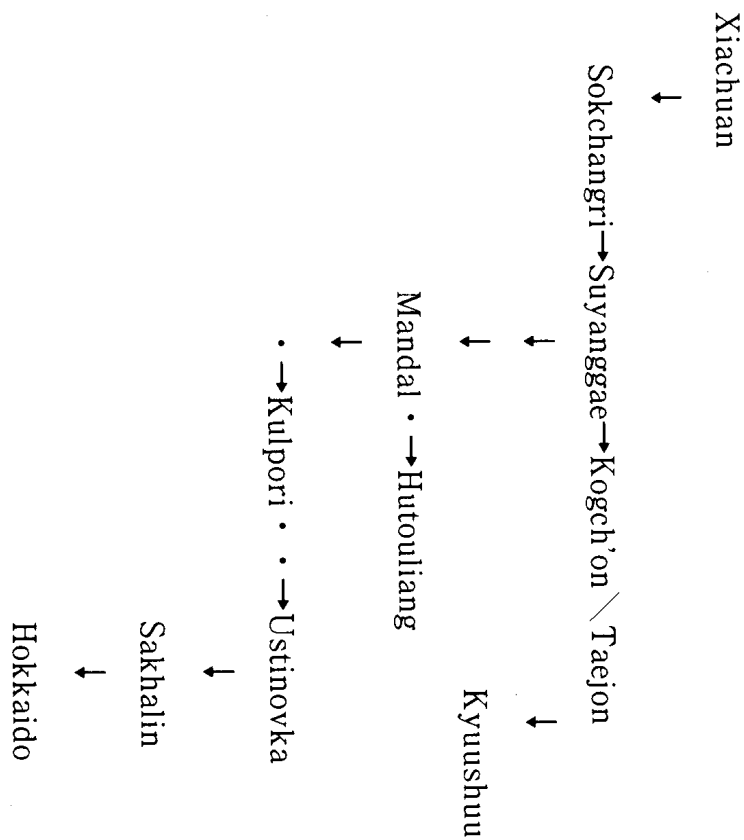
	Xiachuan	Hutouliang	Sokchangri	Suyanggae	Japan	Ustinovka
Technique	S I	S III	S II	S II > I > III	S II > III	S II
Absolute Dates(BP)	23,900 16,400	11,000	20,830	18,600 16,400	<15,000	15,200

また打面形成に際し、一側縁から斜めに細部調整を施した後に、一端(作業面にあたる位置)から縦方向に階段状剝離を施し打面を作るⅢ型細石刃核、そしてそれを作り出すⅢ技法が区別される。それら製作技法は、さらにⅠa類とⅠb類、Ⅱa類とⅡb・Ⅱc・Ⅱd・Ⅱe・Ⅱf・Ⅱg類、Ⅲa類とⅢb類とに細分される。その結果、垂楊介の細石刃核は、Hetao、Sanggan、Yangyuan技法などの中国の技法、湧別、荒屋、蘭越、峠下技法など日本の技法を含む複数の技法が存在するとみなされる。特に、垂楊介遺跡では、Ⅱ技法が一般的であり(四九%)、うち、Ⅱb類・Ⅱc類技法による細石刃核が全体の三八%を占める。湧別技法と同じであるが、ここでは、石核の打面上に擦痕が認められない。なお、Ⅱb類技法で作られた細石刃核のほとんどは、石器製作址一〇、三六、三七出土であるのに対し、Ⅱc類技法によるものは、石器製作址三、四に集中する傾向がある。また垂楊介遺跡で区別されたⅡe類・Ⅱf類技法は、特殊であるらしく、他の遺跡では認められていない。

垂楊介Suyanggeの細石刃石核は、韓国中部の石壮里Sokchangri遺跡とチャンナエ遺跡で、南部のコグチョンKogch'on遺跡とタエジョンTaegon遺跡、ピョンヤン市のマンダルMandal遺跡でも発見されている。当然ながら、中国と日本出土のものとも類似しているが、特に中国の虎頭梁Hutouliang遺跡と日本の北海道の峠下遺跡のものに酷似する例の存在が注目されている。

それらの編年的関係は、表1のとおり考えている。

そして、東アジアの細石刃石器群の遺跡の多くが、絶対年代を与えられていないが、①東アジアの遺跡間に文化的関係があったに違いないが、②拡散あるいは交流によって、発達した細石器技法がそれぞれの地域に影響を及ぼしたらしく、拡散のルートは、以下のように推定できるといふ。



以上の解釈の裏付けとして、垂楊介Suyangga遺跡出土の黒曜石によるNAA分析の結果をあげる。すなわち分析結果は、黒曜石が三つの別々の原産地起源であることを示しているという。そして、垂楊介細石刃石器群は、中

国と韓国の三つの異なる文化の影響によって形成されたと予想する。

いずれにせよ、垂楊介遺跡の文化は、前期旧石器時代から後期旧石器時代にわたって住み着いてきた所産であり、中国、シベリア、韓国、日本の先史人の相互関係についての手がかりをもたらしものであることは疑いないが、垂楊介遺跡の調査は、まだ完全には終わっていないし、また細石刃核製作技法にしても、日本や中国で発見されるものもあれば、垂楊介遺跡独自のものもあり、黒曜石の産地同定など、今後なお詳細な研究が必要であるとする。としても、韓国での旧石器時代研究の重要な中心地域にある垂楊介遺跡の研究が、旧石器時代における中国、シベリア、日本を含む近隣地域での人類の移動経路と文化行動にみられる関係を明らかにするに違いないと、結論する。

Anatoly P. Derevianko 所長・P.V. Volkov 上級研究員の報告「アムール地域の先史居住民による古経済の展開（旧石器時代から新石器時代にかけて）」は、石器の使用痕分析などから道具の機能を決定し、しかもそれらをいくつかのカテゴリーに分ける一方で、アムール河流域での遺跡相互の関係や系統などの考察を通して、先史時代、特に旧石器時代から新石器時代までの経済がどのように変遷したかを明らかにする。

道具を、A・狩猟具と獲物（皮・肉）加工具、B・漁撈具と魚加工具、C・木・骨・石（有機物・無機物）加工具というカテゴリーに分け、それが時間の中でどのようにあらわれるかをグラフをもって示す。すなわち、グラフの横軸に時間（旧石器時代から新石器時代まで）を、縦軸に道具全体に占める道具の割合を配した。その結果、旧石器時代（セレムジャ石器群／オシポフカ文化）から新石器時代（旧石器時代と起源的に結びつくと考えられるグロマトゥハ石器群）への時間の経過の中で狩猟の重要性が増したことが、狩猟具とそれに関する道具が盛んに作られ、皮加工が高い位置を示すに至っていることが理解される。漁撈は全期間を通じて第2位の位置を占めている。石器

は、規格のあるものが作られるようになった。つまり、新石器時代になると器種分化が起こり、専門化が進んだ。最適の素材で最適の形が作られた。また加工がスピードアップされ、押圧剥離技法が多用されるようになった。こ

のような変化や有機物加工具や、皮加工具、魚加工具あるいは処理具の増加は、より快適な生活体制への革新や、より広い地域への拡散の可能性を促したものとみなしている。

韓昌均 Han, Chang-Gyun の「ピョンサリ旧石器時代遺跡の第二段丘堆積物の年代について」は、一九九二年から一九九四年に発掘調査されたピョンサリ遺跡の報告である。遺跡は、ソウルの東四五^キ、ヤンピョン郡の南漢江流域に位置する。遺跡の地層は、六層に分層され、一―四層の粘土層に遺物が含まれる。遺物包含層中には、寒冷気候を示すアイスウエッジ痕などが見られる。また粗い砂と礫からなる六層は、川との比高一〇―一五^キに発達する第二段丘の堆積物とみなされ、中国北部、韓国と北朝鮮の半島全域にみられるものに対応し、年代の指標となる可能性を指摘する。そして、第二段丘堆積物の年代を、更新世後期のいわゆる最終間氷期に比定させた。関連して、同じ第二段丘堆積物に立地する北朝鮮の遺跡が紹介された。

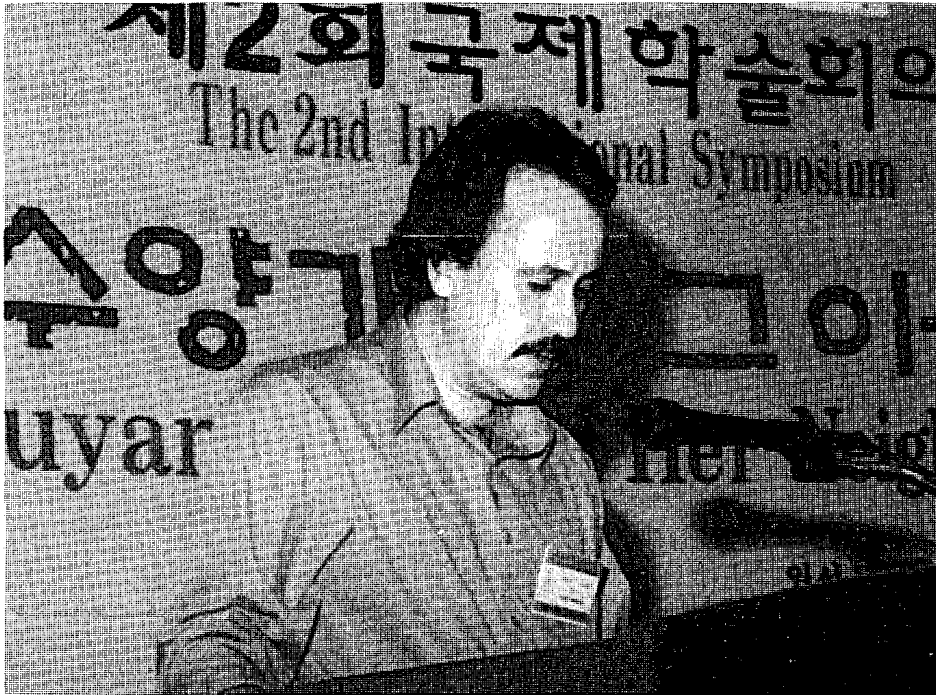


写真 ヴォルコフ上級研究員

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して

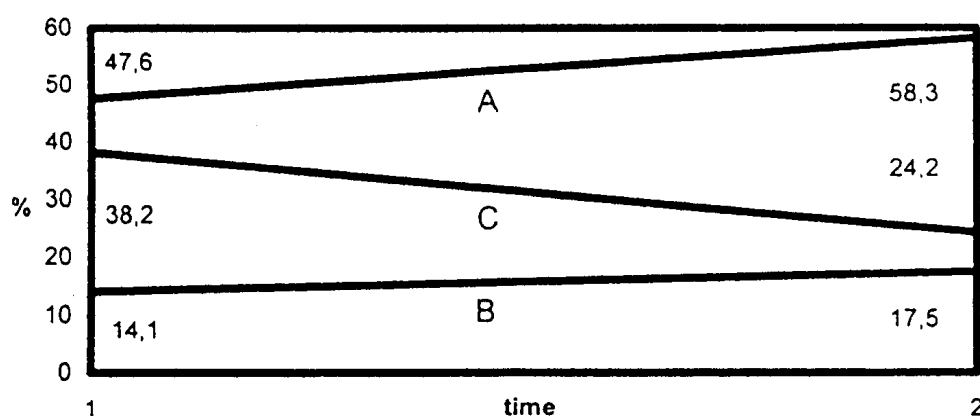


図8 アムール河流域における道具の組み合わせの変遷

洪美英 Hong, M.Y. の「ボウム・ボン洞穴の旧石器文化（フランス、アルプスドビュウ州クイソ）」は、フランス南部石灰岩地帯に位置するボウム・ボン洞穴の発掘調査についての報告である。洞穴内は、更新世中期から後期の堆積層がみられる。入り口部に限り、新石器時代層もみられたという。大量に発見された旧石器時代の資料、特に一センチ以上の大きさの遺物の一万点以上について、統計分析、剥片剥離技術などの分析をおこなったところ、技術コンプレックスの漸進的発展が観察されたという。石核については、初期の段階から求心状剥離、ルヴァロワ剥離、円盤状剥離が見られるとともに、当然ながら上部に向かって構成を変化させながら変遷すると言う。

石材については、遺跡の背後の高原や河原で調達できるものであるが、三〇〜四〇センチ離れたところからのフリントの採取が確認されている。また、礫器やハンドアックス（一端に礫皮を残すランセオライトタイプ）は、上層に向かうにつれて減少し、サイドスクレーパーが増えるという。石材の選択、あるいは一方向や、多方向からの剥離による打面調整などさまざまな指標は、中期旧石器時代から後期旧石器時代への過渡期的様相をよく表していると結論する。

金昌柱 Jin, Changzhu・李隆助 Lee, Yung-jono の「韓国チョン・ウォン Chong-won のトゥルボン Turubong 洞穴のコウモリ化石について―その分類と環

境」は、韓国チョン・ウォン（清原郡）にあるトゥルボン洞穴では、更新世中期の小形哺乳類化石が大量に発見されており、そのうちのコウモリ化石についての分析である。鮮新世から現代までのものが発見されているが、現代のものは小形であることから分別可能であるという。二科四種が発見されているが、その特徴は、更新世中期後半の熱帯種が欠落している一方で、森林や北方種が増加する傾向を示し、直接狩猟対象となった動物ではないが、環境を考察する上では貴重な資料となることを指摘した。

顧玉才Gu, Yucanの「金牛山Jinushan人研究の新たな課題」は、近年大規模な発掘調査が続けられている遼寧省営口の金牛山遺跡の報告である。一九八四年に行われた遼寧省博物館と中国科学院古脊椎動物与古人類研究所の共同調査で人類化石が発見され、注目を集めている。

これまでに、人類化石の年代、あるいは遺跡の年代をめぐって少なくとも三つの異なる考え方があがるが、共伴する化石や絶対年代に加えて、堆積状況、特に風成層を夾まない灰層を覆土とする方形の炉址、そして灰の集積の周囲に大量の石器や破碎された骨があつた状況などから考えて、遺跡は、更新世中期の後半、およそ二六万年前のものであるとした。

また金牛山の人類化石は、形質学的特徴からすると、頭骨と上腕骨は対照的である。頭骨は北京ホモ・エレクトゥスよりも発達したタイプで、大荔（ダリー）人により近い。上腕骨は、より原始的な特徴を示している。むしろ北京ホモ・エレクトゥスの場合は、頭骨が原始的で、上腕骨がより発達した様子をみせている。このような発達の不均衡は、人類発達の複雑さを示すものであるが、分類上、ホモ・エレクトゥスの初期のものと後期のものとの中間に位置づけた。



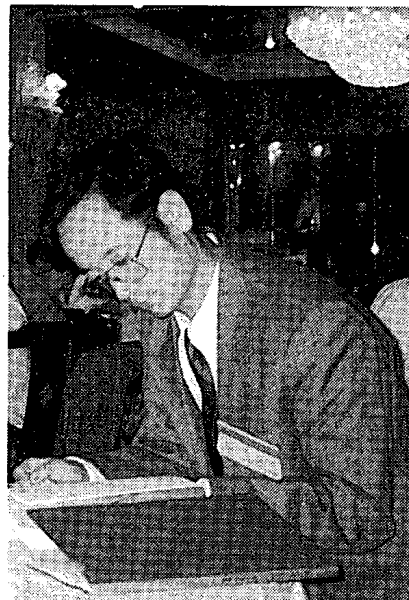
金 昌柱 教授



洪 美英講師



李 憲宗教授



顧 玉才副所長

発掘によって、一二三二点の石器が発見されている。石英や石灰岩を石材として、硬質ハンマーによる直接加撃、あるいは *flock-on block technique* をもって作りだした搔器、削器、尖頭石器（搔器）、チョップングツールが発見されている。

Miaohoushan 遺跡は、金牛山 *Jinushan* 遺跡とはほぼ同時期かやや早い時期と考えられるが、内容は異なる。台石による直接加撃法、多方向調整法がみられるとともに、石器が大形であることなどがあげられる。小形の石器が稀で、尖頭石器（ポイントドエッジツール）とチョッピングツールは、特に重要でない。

周口点 *Zhoukoudian* 第一地点は、中国北部の旧石器時代前期のもっとも重要な遺跡のひとつであり、金牛山遺跡とは離れているが、互いに共通性が多い。*flock-on block technique* が重要であり、中型や小形の調整法が認められ、搔器が主要な構成器種を成している。その他、Kazuo の *Gezidong* 遺跡、Haicheng の *Xianrendong* 遺跡、Yushu の *Zhoujiagutan* 遺跡、Haerbin の *Yanjiagang* 遺跡などは、*jinushan* 遺跡から発達してきた同じ文化伝統に属するものともみている。

李憲宗 Lee, heon-jong の「韓国後期旧石器時代石器製作伝統の多様性」は、石器製作伝統に着目し、放射状剥離を内容とする礫器伝統が韓国旧石器文化の特徴であるとみなし、それら礫器伝統の中から後期旧石器時代の剥片剥離技法が成立すると考察する。

韓国旧石器文化における技術発展には、文化変化に伴う二つの方向が見られる。すなわち、ひとつは、河原で容易に見えてきた石英や珪岩を利用した、多くは調整がまねな補助的な石器にチョッパー・チョッピングツールなどの大形の石器が伴う石器群に関するもので、全谷里、ピョンサニ（二層）などが含まれる。またひとつは、石英や

珪岩、そして火山岩や堆積岩を利用した剥片製石器類で、調整のある搔器類を内容としており、グルポリ Gulpori (一層)、セントル Sengol、チャンナエ Changnae などが含まれる。

後者は、新しい石材の使用、調整技法の使用、そして典型的剥片製道具の出現の三点において前者とは異なり、礫器伝統から剥片製道具伝統へと連続的に変遷したと推測する。

現在までのところ、細石刃を伴わない単独の石刃石器群は未発見であり、石刃技法の出現とその発展過程は不明な点が多い。しかしながら、北東アジア全域の状況からみて、発見される可能性は大である。例えば、極東においてはオシノフカ遺跡、クマラⅡ・Ⅲ遺跡、ノヴォルイバチ遺跡、ウスチノフカⅧ遺跡、中国北部においてはシャラオソゴル、水洞溝、峙峡遺跡、日本においてはナイフ形石器石器群などが相当する。

石刃石器群から細石刃石器群への移行を予想するが、中国の場合、剥片石器(石刃様剥片)伝統が石刃伝統を凌駕しており、他と異なる様相を示している。中国北部では、石刃石器群が細石刃文化(Xiachuan、Xueguan、Hutouliang、Hailierなど)以後に出現する傾向にあり、石刃製石器と剥片製石器を含む細石刃文化の様相は、韓半島の状態に類似している。

韓国の細石刃文化の技術発展は、北東アジアのそれとほとんど似た動きを見せる。最古に位置するのが垂楊介 Suyangge 遺跡であるが、三群一タイプの細石刃核、有茎尖頭器、斜めに刃のある彫器、搔器を伴い、地域的石器とみなされる円形搔器、扇形搔器も含む。周口店第一地点のナイフ形石器文化を別にすれば、東北アジアの早い段階での有茎尖頭器の大量の発見は、韓半島のこの地域の細石刃文化の重要性を示すものである。大陸から単に文化影響を受けたのではなく、北東アジアに一般的な細石刃文化を根付かせている。

石壮里（ソクチャンニ）遺跡は、後期旧石器時代末に先立つ時期にあたる。特徴的な石器として、剥片製細石刃核（ホロカ型に類似）、石刃製の斜刃彫器、拇状搔器がみられる。

後期旧石器時代終末に位置する遺跡は、半島に広く分布している。例えば、

- ① Bukhan-Hongchun complex^ㄱ Sangmureongri^ㄴ Hahwageri^ㄷ 遺跡など
- ② Sunjin-Bosong complex^ㄱ Kumpung^ㄴ Kokchun^ㄷ Okgna^ㄹ 遺跡など
- ③ 南部地域の遺跡群

以上の石器群に共通するのは、典型的タイプと過渡的タイプといえる細石刃核の混在、細石器の存在、剥片製石器の普及がある。ただし、Sangmureongri遺跡については、削器、搔器、斜刃の石刃製彫器、拇状搔器、細石刃が主要な遺物で、他とやや区別される。

従って、韓国後期旧石器時代は、剥片石器伝統と石刃石器伝統に大別される。それぞれが、きわめて複雑な文化的特徴を所有する。礫器伝統から由来する剥片石器伝統は、二方向へ分岐した。ひとつは、基本的に礫器伝統の石材を利用するもの、もうひとつは発達した調整技法を含むものである。石刃石器伝統は、細石刃文化で示される。他地域と比較すると、韓国では細石刃技法のあらゆる発展過程がみられる。この文化が、長期間にわたって連続的に存在したとみなされる理由である。

韓国後期旧石器の複雑さは、北東アジアでの局限（末端）に位置する地理的・気候的・文化的条件からもたらされる歴史的役割のためでるとし、しばしば大陸の末端の様相を示すとともに、ある時は他地域との架け橋となったりすることがある。氷期や間氷期ごとに狩人たちが南部へ移ってきた。そして、保守的な剥片石器伝統との競合が

文化の複雑さを加速したであろうと推測する。とまれ、後期旧石器時代の複雑さは、韓半島の地理的位置と周辺地域の動きの反映であるとまとめた。

Anatoly P. Derevianko・Anatoly N. Zeninの「アルタイ地域の洞窟と開地遺跡例からみたムステイエ文化―後期旧石器時代への移行」は、アルタイ地方、主に多層遺跡のカラ・ボム遺跡、ストラーシユナヤ洞穴の新たなデータを基礎に、中期旧石器時代から後期旧石器時代への変遷過程を明らかにする。

旧石器研究において、ムステイエ文化から後期旧石器時代への移行期の問題は、もつとも論争の多い極めて興味ある課題のひとつであるが、アルタイ地域での精力的な調査研究によって、大きな手がかりが得られつつある。特に、ムステイエ文化から後期旧石器時代にかかわる資料を含む多層遺跡が重要である。報告の概要は、次のとおりである。

アルタイ地域でムステリアン石器群を含む遺跡は、洞穴遺跡のデニソワ、オクラドニコフ、カーミンナヤ、開地遺跡のカラ・ボム、ウスチ・カラコル一、チュメチン一・二が知られている。とりわけ、カラ・ボム遺跡は、もつとも代表的なものである。

カラ・ボム遺跡では、二つのムステイエ文化層があり、ESR測定法で六二、二〇〇YBPという年代が与えられている。ルヴァロワ技法が卓越し、ルヴァロワ尖頭器を作出する石核が広く見られる。あらゆる種類の削器が見られる。また大量の鋸歯縁石器、抉入石器が注目される。小形石器も特徴のひとつである。ともあれ、カラ・ボムのムステイエ複合は、ルヴァロワ技法と鋸歯縁石器・抉入石器との結合によって成っている。

アルタイ地域の洞穴遺跡では、その大部分に年代が与えられている。デニソワ洞穴一〇層と九層のムステリアン



ゼーニン上級研究員

石器群は、一一五、〇〇〇YBPから八〇、〇〇〇YBP、オクラドニコフ洞穴の四枚のムステイエ文化層は、四四、八〇〇YBPから三三三、五〇〇YBPの年代幅がある。ストラシユナヤ洞穴では、最下層の資料が四五、〇〇〇YBPの年代が与えられている。ストラシユナヤ洞穴では一六層が確認され、うち一一層でムステリアン石器群が出土している。ここでは、ルヴァロワ技法と放射状剝離技法が卓越する。ルヴァロワ石核、ルヴァロワ剝片、ルヴァロワ尖頭器、削器、ナイフ、鋸齒縁石器、片面加工石器、挟入石器などがある。同じような様相を呈しているが、五〜二層のみ例外で、石刃の割合が増加している。

これらアルタイの遺跡群にみられる資料は、石核にみられる放射状剝離、ルヴァロワ技法、平行剝離、不定形剝離などの特徴に示されるように典型的ムステイエ文化の多様な局面を示す。

二次加工には、調整、挟入、底部の削平、基部の側縁加工、刃部の平坦加工などがみられる。仮にルヴァロワ剝片などが少量である場合には、石器類の中で削器が主体となる一方、尖頭器、鋸齒縁石器・挟入石器、後期旧石器の石器類、あらゆる種類の調整剝片の量が少ない傾向にある。

一方、後期旧石器時代の初頭に位置する遺跡群は、カラ・ボム(四三三〇〇±一六〇〇〜三〇九九〇±四六〇YBP)、カラ・テーニエシユ(四二二一六五±四一七〇〜二六八七五±六二五YBP)、ウスチ・カラコル一一層(三一四三〇±一一八〇YBP)、アヌイー一二層、デニソワ洞穴一一層、マラヤロマンスカヤ洞穴(三三三三五〇±一一四五YBP)、ストラシユナヤ洞



金在浩 丹陽郷土文化研究会長を囲んで

穴三b・四（二七三六〇±四三〇YBP以前）が知られている。

もつとも典型的なのは、大形石刃を剥ぐルヴァロワ石核、平坦な単設・両設打面の石核が主体で、道具類としては加工のある石刃、挟入のある石刃、縦形削器、多様な彫器を内容とするカラ・ボム遺跡で、カラ・テーニエシュ遺跡に類似している。三つの文化層四・三z・三層が後期旧石器時代初頭に位置づけられるストラシユナヤ洞穴では、剥片製石器製作の傾向が保持されている。多様な削器、少量の鋸歯縁石器・挟入石器などルヴァロワ石器群の特徴を残してはいるが、同時に縦形削器、石錐、彫器などの剥片製石器も見られる。ストラシユナヤ洞穴の後期旧石器時代遺物群については、後期旧石器時代的な道具類の増加と二次調整の質的变化というスムーズな発展が注目される。

アルタイ地域の後期旧石器時代遺物の主要な特徴をまとめると、明確な石刃技法の存在が目立ち（ストラシユナヤ洞穴を除く）、平行石核から縦長幅広石刃が剥離される、

時として剝離がブランクの細い末端に向かって行われる。こうした石核が、実際にカラ・ボムで発見されている。ウスチカラコル一では、斜めの打面をもち、幅広の正面に放射状剝離痕を残す例が知られている。加えて、平行石核と少量のルヴァロワ三角形石核、亀甲様石核、放射状多打面非定形石核がみられる。アヌイー、ストラーシユナヤ洞穴三b・四層でも同様である。

背面や腹面の二次調整が特徴的である。ウスチ・カラコル一、カラ・ボム、カラ・テーニエシユの資料においては、側縁調整、基部の湾曲を修正する平坦調整、抉入加工などが、剥片や刻器削片に卓越してみられるが、量的には決して多くない。主な石器としては、削器、鋸齒縁石器・抉入石器、縦形削器、加工された石刃などがあるし、鋸齒縁石器・抉入石器、ルヴァロワ剥片製尖頭器、石刃はあらゆる遺跡にみられる。しかし、礫器は少ない。また剥片製搔器は、縦長で、まれに二つの刃部をもつもの、斜めで腹面調整をもつものがみられる。

ウスチ・カラコル一出土のフリント製石器の中に、楕円形、葉形の両面石器が目立つ。また、カラ・ボム、アヌイーでも両面石器がみられる。

いずれにせよ、後期旧石器時代初頭の石器群は、石器製作技法と石器形態の多様性を伴う複雑な様相を示しているがこの地域の新しい時代の形成は、後期旧石器時代の要素が増加するという漸進的なムステイエ文化の変容として進んだことが理解される。また、ムステイエ文化と後期旧石器時代の特徴の出現は、地域的ムステイエ文化の中に石器群の起源があるという事実を裏づけている。仮に、ムステイエ文化から後期旧石器時代への過渡期が漸進的なものと定義されるのなら、両石器群の共存を許す期間は、長期間にわたるものであつたはずであり、絶対年代もこれを支持している、と結ぶ。